

近代の工業発展

製糸業から駅前の大工場まで



写真1 東洋時計株式会社



写真2 線路に沿って立ち並ぶ昭和産業株式会社 上尾工場

市域の明治時代の代表的な工業には、酒やみそ、しょうゆなどの醸造業や、蚕から糸を生産する製糸業などがある。中でも生糸の生産は、輸出品の花形として重要産業に位置付けられ、近代化を進める国が積極的に奨励した。明治20年代、養蚕業が盛んだった大石村中分の矢部製糸場が市域で初めて手で糸を紡ぐ「座繰り取り」の製糸場を開業した。その後、明治34

（1901）年に上尾町の上尾製糸株式会社が市域で最初に本格的な「器械製糸」工場を開業した。明治30年代になると、機械で糸を紡ぐ器械製糸が、人力の座繰り製糸を生産額で上回るようになる。

大正・昭和前期になると、金属工業や機械工業などの重化学工業の生産額が、繊維など軽工業の生産額を上回り、産業構造の高度化が進展する。市域では、昭和7（1932）年に、東洋時計株式会社（写真1）が市域初の近代工場として上尾駅西側の柏座に工場を建設し、輸送に際しての利便性の高さから高崎線沿いに急増する近代工場、いわゆる「駅並工場」の先駆けとなった。工場付近は職工相

手の食堂や雑貨店などで活気付けていたという。

続いて昭和11（1936）年には、東京都千代田区内神田に本社を置く昭和産業株式会社が、上尾駅西側に製菓（餡）を製造する上尾工場を設立した（写真2）。上尾に進出したのは、ぶどう糖などの食品を製造するための地下水が良質かつ豊富で、原料となるサツマイモの産地であるという立地条件を備えていたためである。その後、昭和産業は市の発展に伴い、駅西口開設や商店街、西口広場や道路の開発に際して工場用地を提供して敷地は縮小していったが、設立当初は上尾駅の西側の約7万平方メートルという広大な敷地の中に、鉄骨造りの工場建物が約2万平方メートルにわたって軒を連ねていた。

これら上尾市の近代化を進めた駅付近の工場は、戦後の住宅地化に伴う工業立地の変動などにより、昭和50年代以降、市内から移転していったが、昭和産業上尾工場跡地に建つショッピングセンター「ショーサンプラザ」が当時の大工場の面影をしのばせている。

（上尾市生涯学習課）

コラム
column

工業団地建設、県下2位の工業都市へ

戦後の復興へ向けて、埼玉県では工場誘致を積極的に進め、昭和27（1952）年に「埼玉県工場誘致条例」を制定し、上尾町でも同年に「上尾町工場誘致条例」が制定された。この二つの条例の第1号として、昭和28（1953）年に東邦レース（株）上尾工場が設立され（写真3）、戦後の工業発展の第一歩を踏み出した。昭和35（1960）年に同条例が廃止されるまでの間、大谷・大石地区にくろがね小型自動車製造（株）、上尾地区に（株）藤井製作所（自動耕運機）、大石地区にブリヂストンサイクル工業（株）などが進出した。さらに昭和36（1961）年には日産ディーゼル工業（株）ほか11企業が進出し、市域内への工場進出はその後も続いた。

これは以後の工業団地建設が原動力の一つとなっており、市域では、上尾市が自ら事業主体となり、昭和37（1962）年から45年の間に平塚工業団地、坊山工業団地（中新井）、領家工業団地が造成された。上尾市の工業生産出荷額は年々増大し、昭和45（1970）年には戦前から工業都市として知られてきた隣接する旧大宮市を抜いて、川口市に次ぐ県下第2位の工業都市へと発展した。



写真3 東邦レース株式会社（航空写真）